

# 旧東ドイツの言語使用

森江かおり

(ドイツ語学・ドイツ文学)

本論文では、1949年10月7日に成立した社会主義国家である旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）における「新聞」というメディア（媒体）の役割について社会言語学的観点から論じている。ソビエト連邦共和国から社会的・経済的影響を大きく受ける中、情報媒体にも影響は及んだ。新聞において、そうした影響がどのようにあらわれたか、使用語彙やレイアウトの分析により、あきらかにした。分析には、『ベルリナー・ツァイトゥング』と『ノイエス・ドイチュラント』の2紙を使用し、第二次世界大戦直後の創刊時、社会主義体制が安定する1972年12月22日、そして壁が崩壊し、東西ドイツが統一された1990年10月3日の3つの時点の一面を比較した。分析をとおして、情報媒体の役割は、その時代の政治体制によって、変化するということが明らかになった。

例えば、創刊時の『ベルリナー・ツァイトゥング』は、ソビエト連邦に関係する者のスピーチ原稿をその一面に掲載することで、ソビエト連邦の威力や、反ファシズムや社会主義を示した。一方、『ノイエス・ドイチュラント』は一面に渡って国の支配政党であるドイツ社会主義統一党を褒めたたえ、新聞を党の宣伝として大々的に利用している。この時代の新聞は、支配者の特定の意図を伝えることで、現代とは違う形で情報媒体としての役割を果たしていることがわかる。1972年の東西ドイツ基本条約は、ドイツの歴史を変えた1つの大きな出来事であったが、その日は両紙ともにソビエト連邦の建国50周年式典に関する報告が中心に扱われている。この当時の新聞は具体的な情報が取り上げられてはいるが、両紙の記事の割り振りや内容は非常に類似しており、政府の情報統制が徹底されていたことがわかる。東西ドイツが再統一を果たした1990年10月3日の両紙の記事には、旧東ドイツ国民の喜びと不安に溢れている。記事内容やレイアウトは全く異なり、記者の個人的な意見が自由に記述されている。表現の自由に対する政治の圧力がなくなって彼らはようやく、人々に正しく、等しく、多様に情報を伝える、というメディアの本来の役割を取り戻したことがわかる。